



# 碑文なき記念碑が語るマレーシアの抗日の記憶をめぐる抗争

村井 寛志 (非文字資料研究センター 研究員)

多民族国家であるマレーシアでは、マレー人を中心とするブミプトラが全人口の66%を占めるが、中国からの移民の子孫である華人も26%を占めている。隣国のシンガポールがやはり多くの華人人口を抱えながら(76%)、周辺国に配慮した英語中心政策によって中国語(華語)の公式な使用が抑えられてきたのとは対照的に、マレーシアの華人コミュニティにおいては、ある種の自治が認められ、中国語による教育や、中国語のマスメディアが受容されている。

こうした中国語の通用性に助けられ、筆者はここ数年、マレーシア農村部における華人コミュニティの現代史に関するオーラル・ヒストリーの調査に携わっている。調査は主として、第二次大戦後を対象としているが、日本人である筆者が聞き取りを行う際、現地の人々から温かい協力を受けることが多い一方で、しばしば、1941年12月～1945年8月の日本軍による占領で肉親を殺されたり、迫害されたという老人に出会う。また、そうした直接的な経験がない世代からも、日本の戦争責任や歴史認識について厳しい質問を投げかけられる機会がある。元々中国現代史を専門とする筆者にとって、中国本土においても同様の経験をすることは多く、これに対してどのように応答するべきか、いまだにはっきりとした答え

を出せていない難しい問題だ。

それはそれとして、一方で、マレーシアにおける日本占領の記憶は、そこで用いられるボキャブラリーなど、一見中国本土におけるものと似ているようにも見えるが、中国本土とは相当に異なる、戦後のマレーシア社会の独自のコンテキストが背景として刻み込まれている。ある記念碑の事例からこれを考えてみたい。

首都クアラルンプールとヌグリ・スンビラン州の州都スレンバンを結ぶ高速道路沿いに、主として華人向けの霊園である孝恩園がある。この中に、「九一烈士記念碑」(図1)と「馬來垂抗日英雄紀念碑」という、2000年代に建設された比較的新しい2つの記念碑があり、筆者は2008年8月にここを訪れる機会を得た。

前者は、「九一烈士記念碑」とだけ書かれた石碑を中心に(図2)、その背後と両脇に黒い石版が置かれ、両脇の石版の後ろには、不ぞろいの石柱が18本立っている(図3)。記念碑の由来についての説明は一切なく、両脇の石版は、普通であればそうした内容が書いてありそうな位置にあるため、文字が刻まれていないという点が却って際立った印象を与える。後者は、そのすぐ近く



図1 九一烈士記念碑 (遠景)



図2 九一烈士記念碑 (主碑)



図3 九一烈士紀念碑（主碑左脇の石版と石柱）



図5 馬來亞抗日英雄紀念碑碑文（マレー語）



図4 馬來亞抗日英雄紀念碑碑文（日本語）

にある三層構造からなる方柱で、基底部には「日本のマラヤ侵略に抵抗した英雄たちの碑・1941—1945」という文面が、日本語（図4）、マレー語（図5）、英語、タミル語の四言語が四面に刻まれている。

これらの記念碑について、2006年12月、マレーシアのザイヌディン情報相からマラヤ共産党関係者を記念しているとして批判があり、これを受けて、孝恩園が位置するスグリ・スンピラン州のモハマド・ハサン州首相が記念碑の撤去を要求するという事件が発生している。「九一烈士紀念碑」の「九一」とは、1942年9月1日、クアラルンプール郊外のパトゥ・ケイブに集まったマラヤ抗日人民軍（その中心はマラヤ共産党）の幹部が、書記長ライ・テクの内通に導かれた日本軍の急襲を受け、18人の幹部が斬首に処された事件を指しているのだ。

マラヤ共産党は、日本占領下においてイギリス植民地当局と共闘関係にあったが、戦後は独立方式をめぐるこれと対立、武装闘争を行った。その対立は独立後のマレーシア政府との関係にも引き継がれ、1989年にマラヤ共産党が活動を停止し、和解が成立したものの、公然とその関係者を顕彰することは現在もタブーなのだ。

加えて、日本占領に関する記憶のあり方自体、マレー

人と華人ではかなりの温度差がある。日本軍による虐殺や迫害は主として華人（当時の呼び方では「華僑」）に向けられ、マラヤ共産党を中心とする抗日活動に携わった者にも華人が多かった。マレー人に対しては、日本はイギリス植民地下の民族集団間の分断統治を引き継ぎ、占領に利用した。このため、戦後の華人側の報復も加わり、民族集団間の分断はいっそう深刻なものとなる。こうした背景が、マラヤ共産党に対する“反共”には、しばしば反華人の意識が重ねられる。

記念碑をめぐる議論にもどろう。マレー系政府要人からの批判に対し、華人社会は党派を超えて猛反発し、結局記念碑の撤去は実現しなかった。しかしながら、この一件は、抗日の記憶が華人社会の公式の記憶として刻み込まれていることを示すと同時に、一方で、ストレートにそれを出してしまうことが、マレーシアの文脈においては多数派マレー人との間に摩擦を引き起こすリスクを伴っていることを改めて示す結果となった。抗日の歴史がそのまま中国共産党の政権獲得の歴史へとつなげられる中国本土の公式的記憶とは、置かれた環境が大きく異なっていると言えるだろう。

「九一烈士紀念碑」の石版の空白は、タブーの中で歴史的記憶を顕彰することの難しさを物語っている。しかし、この困難は同時に、四つの言語によって書かれたもう一つの記念碑に示されるような、痛ましい記憶を、華人という一民族集団の枠を超えたより普遍的なコンテキストに開いていこうとする試みをも生み出した。後者の四つの言語の中には日本語も含まれている。加害者である日本人に対してさえも、記憶の共有の可能性が開かれているのだ。これに日本人はどう応えるのだろうか。

附記：写真は全て筆者による撮影（2008年8月）。